

平成 18 年 4 月 1 日

## 雑司が谷旧宣教師館で「おばあちゃんのおはなし会」開催

～ 改修工事が終わり、よみがえった建物で物語を聞くひとときを ～

昨年の 12 月から行っていた改修工事が終了し、本日 1 日から 4 ヶ月ぶりのオープンとなった区立雑司が谷旧宣教師館（雑司が谷 1-25-5）で、大正時代に目白で創刊された日本初の童話童謡雑誌である『赤い鳥』に掲載された作品を、詩人の小森香子さん（75 歳）の朗読で語り継ぐ「おばあちゃんのおはなし会」が催された。

会場となった雑司が谷旧宣教師館は、明治 40 年にアメリカ人宣教師マッカーレブにより建てられた、区内に現存する最古の近代木造洋風建築であり、都内でも数少ない明治期の宣教師館として、平成 11 年に東京都有形文化財に指定されている。区は昭和 57 年に同館を取得し、建物調査や保存修理などを経て、平成元年から一般公開している。

また平成 17 年 12 月からは、昭和 49 年に葺き替えられて以来 31 年を経過し耐用年数を過ぎていた屋根の葺き替えと、前回の塗装から 5 年を経過し塗り替えの時期となった外壁の塗装を行う改修工事を行っていた。今回の改修工事は、屋根をこれまでのコロニアル素材から建築当時の屋根素材であった鉄板に近く、腐食にも強い銅版葺きとしたこと、外壁の塗装も、これまでの合成樹脂調合のペイントから建築当初に塗られていた油性調合ペイントを用いている点が特徴となっており、明治 40 年建築当初の姿により近づけようとした点が特徴となっている。

館内には、ここで幼児教育や青年教育を行なった宣教師に関する資料のほか、かつてこの地で花開いた文化にスポットをあてた展示がされており、そのひとつとして、大正時代に目白の地で創刊された日本初の童話童謡雑誌『赤い鳥』を中心とする児童書コーナー（赤い鳥コーナー）がある。

『赤い鳥』は、1918（大正 7）年、当時夏目漱石門下の逸材と呼ばれていた鈴木三重吉により創刊された。有島武郎、芥川龍之介、菊池寛、小川未明、坪田譲治らが童話を、北原白秋、西条八十、三木露風らが童謡をと、そうそうたる顔ぶれが『赤い鳥』誌上に作品を発表し、日本児童文化・児童文学の世界に大きな足跡を残した。そして、当時の目白を含む旧雑司が谷地域には、鈴木三重吉をはじめ、小川未明、坪田譲治、秋田雨雀らが住み、活発な創作活動を展開した。また、『赤い鳥』に続き、自由学園創立者である羽仁もと子が興した婦人之友社より『子供之友』『新少女』が発刊されたのもまたこの地であり、まさに当時の雑司が谷は日本の新しい児童文化の発信地であった。

こうした文化遺産の継承を図ろうと、同館の児童書コーナーには『赤い鳥』の復刻版をはじめ、当時の優れた児童文学作品が置かれ、自由に手にとって読めるようになっている。しかし、あまり利用される機会がなく埋もれた存在となっていたため、「もったいない」と、同館をよく訪れていた詩人の小森香子さんが『赤い鳥』の作品を語り継ぐ朗読会を発案し、「おばあちゃんのおはなし会」として平成 15 年 4 月にスタートした。毎月第 1 土曜日に行ってきたこの催しも今回で 33 回目を迎え、今では地域住民の参加者だけでなく、藤沢や杉並など遠方からのリピータの姿もあるという。

本日、旧宣教師館内の 10 畳ほどの角部屋を会場にして読まれた作品は、小川未明作の『北国のはなし』と楠山正雄の『針』の 2 作品。どちらも児童文学でありながら、さまざまな示唆に富んだ大人にとっても聞き応えのある作品。小森さんが「感情を込めると、自然に身振り手振りがついてしまう」と話すとおろ、情感のこもった読み聞かせに、集まった 20 人ほどの観客はそれぞれにイメージを膨らませ、物語の世界に浸っていた。

小森さんは、現在は大塚在住だが、雑司が谷育ちで、母親が小川未明と親交があり、幼少時に

は母親から未明の作品を読み聞かされて育ったという。

小森さんは「イラク戦争が始まった当時、私自身が平和のためにできることは何だろう。と考えたときに、平和で穏やかな日常を願って、ここで読み聞かせをすることを思いつきました。」と語り、「実はね。最初は誰もお客が来なかったのよ」と笑いながら、「今では常連さんも増えたと、ここまで続けているのは、ストレス解消も兼ねて、私自身が楽しんでやっているからね」とこれまでを振り返った。

「四季折々の花が咲く穏やかなこの場所が好き」と話す小森さんは、「これからも続く限り『赤い鳥』の作品を語り継いでいきたい」と語ってくれた。

**詳細：雑司が谷旧宣教師館**